

今ふうの遊びを取り入れて一首にしあげている。このように、「今」「今ふう」の素材に積極的に挑戦する姿勢をよしとしたい。

春ひとひネットのうへの君の絵に添ひ三十歳の君に添ひをり  
田中薫

亡き夫君の描いた絵画がアーカイブスの画像になって  
いるのを、偶然ネット上で見たときの心の動きに取材し  
た今月の六首。中でこの作、過不足なく具体的な事情に  
言及しつつ、二つの「添ひ」をうまく活かして一首をし  
あげている。

かはりゆくかたちありさま方丈の部屋のテレビに知  
る仮想通貨  
佐々木智子

なんとなく知ったつもりになれるテレビという機器を  
風刺しつつ、「仮想通貨」という名前からして不審な通  
貨をクローズアップする。私たちが知識とか情報とか呼  
ぶものの不安定さが伝わってくる一首。なお、「かはり  
ゆくかたちありさま」という大和言葉のみごとな使い方  
に感心した。

もう何の時に飲むのかわからない薬二錠を掌にのす  
新留紀代美

長い間飲んできて、もう習慣になってしまっているの  
意味だろう。日常生活のなかで、意味が次第に薄くなっ  
てくるあれこれが思い出される。

独房は二列に並びそれぞれの音を潜めるハモニカの方  
穴  
十亀弘史

刑務所の内部をうたう。ハモニカにたとえつつ、「音を  
潜める」としたところに、注目。独房一つずつに人が  
おり、ふだんは静かだがそれぞれが声や音をひそめてい  
るのである。生きるとは、考えてみれば、音を抱いてい  
ることなのである。

卒業の言葉唱へて風呂長し娘にかける言葉をさがす  
久松宏二

娘は風呂のなかで、答辞とか卒業生の言葉とかを練習  
しているのだろう。本人にとっては、あるいは家族にとつ  
ては一大イベントだが、しかし、当事者以外には、ユー  
モラスに聞こえる。親ばかの幸せを満喫しているユーモ  
ラスな場面。

もう既に闘っていた吾の体これから気持ちも一緒に  
闘う  
笹本碧

肉体の内部のことを、私たちはほとんど知らないで生  
きている。自分の内部で闘いがはじまっていたことを  
知った衝撃。初句のはじまり方がうまい。病院で検査結  
果を知らされたときの心の波紋が読みとれる。

この春も信綱愛でいし梅咲きてポランテアはや十  
四年経ぬ  
森川陽子

熱海の佐佐木信綱旧居・凌寒荘の管理、さらには土・  
日つめていて、観光客を相手に案内・説明などを担当す  
るポランテアを務めてくれている「凌寒会」が話題で  
ある。凌寒荘には廊下のすぐそばに古い梅の木があり、  
それを信綱はことさら愛し、歌にも詠んでいた。